

錦秋

紅葉の季節が始まりました。

既に、黒岳からは色づいた山の便りが届いています。私のオフィスから見える楓の葉からも、秋の気配を感じますが、色づくにはもう少し時間が必要です。

紅葉は、9月初旬の大雪山を皮切りに徐々に南下していきませんが、紅葉の見ごろが移って行く様子を桜前線になぞらえて紅葉前線と呼び、九州でも12月の初め頃には終わります。

一口に紅葉といっても細かく見れば赤、黄色、褐色と色合いも様々ですが、木々が次第に色づき、美を競っている様は、まるで一本一本の木に意思が働いているかのようです。

緑深い山々が、秋になると「錦秋」という表現さながらに色とりどりの姿を見せるのは何故なのだろう、と人間はしばしば感傷的になりますが、哲学者で詩人の串田孫一は「木々は人間に、秋ごとに奉仕しているわけでもなければ、お互いにその美を競っているものでもない。黄葉も、落葉も、一つの厳然とした営みを行っているために美しい。」と述べています。

随分と昔になりますが、秋も深まった頃に、家内と二人で登別のオロフレ峠を通ったことがあります。その時の、全山を被うばかりの紅葉の美しさは、今でも忘れることが出来ません。自然の造形美は、神の業ではないかと私には感じられます。とはいえ、寒風やみぞれに晒されながら散って行く紅葉を見るのは寂しくもあり、また、散った後の風情も寒々としていますので、私は、紅葉の季節は好きになれません。

でも最近、

「黄葉して くろがねの幹 林立す」

という赤城さかえさんの俳句に接して、ちょっと考えを改めることにしました。この句をとおして、何があっても揺るがない、ぎゅっと引き締まった詠み手の意思というものが伝わってきませんか。

自分をすっぽりと被っていた緑の葉が、やがて色づいて美しく飾り、最後は散って行く。しかし、硬骨な幹は、変わらずにしっかりと立っている。「人はかくあるべし」などと、かつてに紅葉に事寄せて考えてしまう私は、やっぱり日本人ということでしょうか。(塾頭 吉田 洋一)